

日本史授業における

ICT教材の活用

山田 俊幸

はじめに―「ICTはたいへん！」の克服―

近年のICT機器の発達には目覚ましいものがある。教育現場においても初任者研修・十年経験者研修などの場で、ICT機器を用いた授業づくりの研修が行われていると聞く。

確かにICT教材の有効性は論を俟たない。画像・グラフなどが表示され、動く仕掛けが生徒を視覚的に引き付けることは事実である。学習指導要領改善のための文部科学省中央教育審議会答申でも、日常的にICTを活用できる環境づくりが求められている^①。

しかし、日々の授業でのICT機器の使用に対して、まだ心理的ハードルが高い教員は多いと考えられる。この理由の主たるものとして、次の二点が挙げられよう。①ICT機器を使った授業は、スライド作成などに膨大な準備時間を要し、困難で

ある。②機器の使用に不慣れであり、教室でのコンピュータ接続の準備に手間がかかるなどの実態がある。

そこで、コンピュータ関係にあまり詳しくない教員にも負担感が少なく、ICT教材の利点である「生徒にビジュアルなインパクトを与え、考察を深めさせること」や、「授業への集中力を向上させること」を活かした実践の一端を紹介する。これにより、日本史教育におけるICT教材の活用の一助とすることを本稿の目的としたい。

一 ICT機器を「取り入れる」

まず、ICT教材活用の前提として、「チョーク&トークに全面的に取って替わる」という言説を考え直したい。この言説はICT機器利用を促進する際に使われがちである。

しかし、そもそも教員が教えるにせよ、生徒が活動するにせよ、「トーク」は必要である。また教育活動を行うにあたって、黒板（またはホワイトボード）など多数数の生徒が見ることのできる器具は不可欠である。我々教員が脱却していかなければならないのは「教師が板書・説明して、生徒はそれを写すだけの一方的講義」であり、チョークとトークを捨てることではないと考える。このことはICT教材の利用において重要である。

本稿におけるICT教材活用の実践例においても、チョークを使うこと、教師が話すことは排除されない。ICT教材は授業の中に「取り入れる」ものである。

二 ICT教材の得意分野を活かす

ICT教材にも得意分野と不得意分野がある。教師による口頭での指導や生徒の主體的な考察、共同的な学びでこそ学習効果が得られることも多い。本稿ではICT教材の活用による授業改善の効果が高く、生徒の学習を深化させられると筆者が考え、実践した分野を紹介する。

(1) 文化史

特に前近代の文化史においては、彫刻・建築といった視覚資料が負う役割が大きい。この分野を羅列的に板書したり、プリントの穴埋めをさせたりしても、生徒にとってこれらの内容はまるで記号のようにしか見えないだろう。

ここでは、古代文化史について私がICT教材を作成し、授業で活用した実践例を挙げる。例えば弘仁・貞観文化²⁾において、「この文化を代表する室生寺弥勒堂釈迦如来坐像に一木造が用いられていること、そこでは特徴的な翻波式が見られること、神秘的な表現が見られること」はチョーク&トークだけでは、生徒が理解するのは難しい。飛鳥文化における北魏様式と百

濟・中国南朝様式の違いも、天平文化における塑像と乾漆像の成立も、ビジュアルなインパクトを与えてこそ生徒は考察を深められると考える。

むろん、仏像などの作品について説明する技術は重要である。しかし、教科書や図説の図版を利用する従来の方法では、生徒は板書と手元の図説に視線を往復させながら話を聞き、考察しなければならぬ。スライド・DVDなどが投影された前方を見させ、注意を喚起したい部分へ確実に視線を向けさせた状態で教師が説明する方が有効である³⁾。これにより生徒は意識を分散せず、前方に集中することができ、学習は深まると考える。

以下には筆者が使用している、飛鳥文化を扱うスライドの一部、北魏様式の法隆寺金堂釈迦三尊像に関するものを掲げる(二頁参照)。なお、この部分の授業はプリントで行っている。

スライド上には「北魏様式」の文字(A)、法隆寺金堂釈迦三尊像の図像(B)、「法隆寺金堂釈迦三尊像」の文字(C)、法隆寺金堂などの図と「※法隆寺(飛鳥文化の建築)」という文字(D)を配置する。最初の時点では図像Bと穴あきの「」しかない。次に、二つの黒い○が挿入され、Aが「」の中に赤字で入ることで北魏様式に特徴的な部分を指摘する。ここで生徒に北魏様式の特徴と、この作品において見られる特徴を理解させる。その後、仏像の名称であるCが「」に赤字で

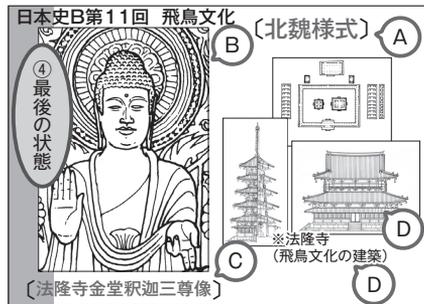
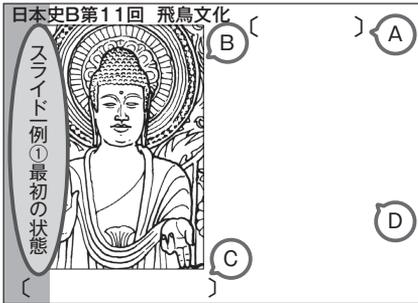
現れる。最後にDの図と文字が現れる。こうして、生徒が作品の名称のみならず、時代と様式を一目で捉えられるようにしている。

このように、画像や図が重要な文化史ではICT教材を活用する意義は大きいと考える。著作権等の問題があるため、教科書や図説などの書籍、インターネットの画像や図を使用する際には注意が必要である。⁽⁴⁾ スライドとは電子紙芝居である以上、生徒全員が見られれば良い。教科書・図説を書画カメラで投影する方法もある。また、従来からある大判写真を持つていき、机間を回ることでも一応の代替はできるし、これを書画カメラで投影する方法もある。

(2) 地図・グラフ・図版

次いでICT教材の活用が有効なのは、「大きくしてみるとわかりやすいもの」である。以下、実践例を紹介する。なお、本節で紹介する例は黒板を用いノートを取らせる授業や、それをもとに討議させる授業を想定している。つまりチョーク&トークとの併用である。

具体的には、「寄木造」の図〔詳説日本史〕七六頁〕、「開発領主の館」の図(同一〇四頁)、「町と町屋敷の模式図」(同二二二頁)などが挙げられる。これらは教科書ソフトの「地図・図版」から見ることで、スライドを作らずとも



飛鳥文化のスライドの一例

画像単体で投影できる。⁽⁶⁾

地図やグラフ⁽⁷⁾は、黒板上のスクリーンなどに投影し、説明を加えることでわかりやすくなる。一例として「江戸時代の交通」の地図(同二〇七頁)が挙げられる。一枚目には地図そのものを、二枚目には東廻り海運・西廻り海運・南海路など重要部分に目立つ色を付けたものを作り、順次見せれば効果的であろう。一枚でもレーザーポインターでなざれば効果はある。投影したスクリーンやホワイトボード上に水性ペンなどでなざれば、複雑なコンピュータ上の作業は不要になる。

地図に関しては、生徒に地理的理解を深めさせ、地図読解の技能を習得させるため、ノートに自分の手で書かせることが重要である。「列強による中国の分割」の地図(同二九三頁)はその一例である。この場合、「お手本」としてデジタル図版を投影し、生徒はノートに、教師は黒板にそれぞれ地図を描き、要地(威海衛、旅順など)を書き込む。これにより教師が地図を描き、その後生徒がそれを書き写す従来の方法より時間が短縮でき、教師と生徒が協働する授業になる。加えて「正確な」地図から、「略されているが重要部分を強調した」地図を描くことで、地図上の何が重要なかを生徒が理解しやすくなる。この方法はグラフにも適用できる。「綿糸の生産と輸出入の変遷」(同三〇二頁)は近代日本の産業を考える上で最重要資

料の一つであり、センター試験などにも出題されている。この場合も、ポイントとなる点(生産量が輸入量を上回る時期、輸出货量が輸入量を上回る時期)を示しつつ、生徒とともにグラフを描く。このとき、横軸(年代)の下に政治・外交上の出来事などを生徒に書かせることで、政治・外交史と経済史の関連性を理解させ、より深い考察を行わせる効果的な材料になる。

三 DVDを活用する

ICT、と聞くと「コンピュータのスライド」のみを考えがちであるが、DVDとて有効な情報通信技術ⅡICTである。日本史のDVD教材の一例として「動く写真集 ムービー日本史」がある。VTR映像は、動きがあるがゆえにインパクトがある。視聴覚室の大型テレビ画面や教室のスクリーンに投影し、途中で止めて説明を加えれば、デジタル教材になりうる。

日本史においては歴史上の事象の因果関係を考察することや、他時代との対比を行うことで、歴史的思考力を養うことが重要になる⁽⁸⁾。教師は時代の全体像を捉えさせる問いを発したり、歴史的思考力を喚起する言葉がけをしたり、あるいは生徒に問いを考察させる。授業に深く関係する場面や、授業全体に関係する問いを発する場面でDVDを一時停止し、指示棒やレーザーポインターで示せば、口頭で述べたりプリントに印刷して渡し

たりするよりも生徒の印象に残る。その結果、生徒が歴史的現象を容易に理解し、深く考察できると考える。地図上での領土の拡張や、他国への進出がアニメーションで表示されるDVD映像は説得力がある。何より、教員がスライドを手作りする手間も省くことができる。

また、アクティブラーニングの一つとして、問いを投げかけ、話し合いなど共同的な学びを行う際にもこのようなDVDは重要なツールとなるだろう。DVD教材は、生徒に見せておくだけの教材としてはもったいない。学習の導入やまとめとしても、授業のポイントを押える素材としても、ICT教材としてのDVDは活用する価値がある。

四 どうしてICT機器を利用するか

ICT機器のうちプロジェクターやスクリーンが各教室に配備しており、PCとの接続が容易であれば、ICT機器の準備は、コッさえつかめば難しくはない。しかし学校現場ではICT機器の準備に時間がかかる場合や、準備の方法がわかりにくい場合もある。この場合、視聴覚室やICT用の教室の利用を提案したい。視聴覚室には大型スクリーンや大型テレビが配備しており、DVDの映写はもちろん、コンピュータからの接続も行いやすい。普通教室と違い生徒が常にいる場所でない

ため、空き時間や始業前に準備ができる。

また、社会科教室など「空き教室」があれば、事前にICT機器を準備しておくことができる。理科であれば生物室など実験室にプロジェクターとスクリーンを常置することも可能であるが、地歴公民科でもそのような特別教室があれば使いやすい。他教科にICT機器を利用する教員が多くなるのであれば、特別教室を共有する方法もあるだろう。

おわりに

以上、筆者の実践と経験をもとにICT教材を活用した授業実践の一端を紹介してきた。機器等について不勉強な点があることは慚愧に堪えない。

ただ、ICT機器には様々な使い方があり、時間的・環境的制約がある状況下でも、まずは敬遠せず、少しでも使用することと意義があると考えられる。また、今年三月に発売された山川出版社『デジタル指導書』（日本史・世界史）には授業用パワーポイント板書例が含まれている。例えば、「008 飛鳥の朝廷」に本稿で紹介したような飛鳥文化のスライドを取り入れることで、より魅力的な授業を展開できる。

いうまでもなく、ICT機器を使用する際もこれまでと同様、絶え間ない教材研究が不可欠である。筆者もこれを自戒しつつ

ICT教材を活用した日本史授業を考えていきたい。

註

- (1) 文部科学省中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）【概要】」（二〇一六年十二月二十一日）九頁など。
- (2) 唐風文化とも表現される。以下、歴史用語については筆者が授業で使用了『詳説日本史』（日B三〇一、山川出版社、二〇一四年）に沿って説明する。また、今後『詳説日本史』というときは同書を指す。
- (3) もちろん、図説における図版・図表類は生徒の主體的な学習や共同的・対話的学習のためには有効な道具である。
- (4) 著作権第三五条によって、学校教育現場における著作物利用の必要性や学校教育の重要性などから、例外的に著作権者の許諾を得ずに、画像を利用することができる。しかし、利用には厳しい要件が定められているため、注意が必要である。
- (5) 例えば山川出版社『第一期 日本史写真集』『第二期 日本史写真集 続文化編』など。
- (6) なお、二〇一七年三月に発売された山川出版社『デジタル指導書』『デジタル素材集』では、『山川 詳説日本史図録』掲載のものも含め、画像が豊富に盛り込まれている。
- (7) 「地図その他の資料を一層活用させる」ことの重要性は『高等学校学習指導要領』（二〇〇九年）のうち日本史Bの「内容の取扱い（一）ウ」にも記述があり（四二頁）、今後の学習指導要領においても資料活用能力は重視されるであろう。
- (8) 歴史的思考力については、「諸事象の本質をその歴史的な形成・展開の過程の実証的な考察によってとらえる歴史的な見方や考え方を身に付け」とも述べられている（高等学校学習指導要領解説 地理歴史編）二〇一〇年、六三頁。
- (9) 例えば山川出版社『授業で使える世界史映像集』では、多くのアニメーション地図が盛り込まれている。
(やまだ・としゆき／愛知県立旭陵高等学校教諭)